

宗久論

——「都のつと」の作者——

稲田利徳

はじめに

日本の文学史に甚大な影響を及ぼした、優れた作品を残した作者の追究が盛行しているのは、しごく当然の営為であり、それ相当の意義がある。

それとは逆に、ささやかな作品しか現存させ得ず、文学史のなかに埋没して稀薄な存在になつてゐる作者に、スポットを当てる試みも、マイナーな作家発掘という好事家的趣味とは別次元の意味においてなされてしかるべきである。

ここに宗久という歌僧がいる。「都のつと」という紀行文学作品を残すとともに、三つの勅撰集に四首の和歌が入集する歌人でもある。

彼は南北朝という疾風怒濤の時代に出家を遂げ、九州から東北地方まで仏道修行を目的とした漂泊の旅を遂行した後、京洛の歌壇にも登場する一方、今川了俊の九州鎮定の際、その使僧としても活動している。

そこに南北朝の時代を生き抜いた、文人的な僧侶の生きざまが、複雑な陰翳を伴つて彷彿としてくる。

この論考では稀少な作品や記録類によつて、わずかに辿ることのできる足跡を綴り合せながら、宗久の生の有様と作品の一端に触れてみたい。

一

宗久の人と作品を中核に据えた論考は管見に及んでいないが、辞典類には次のような解説が加えられている。

宗久きう【南北朝歌人】瞬庵。生年未詳—康暦二一三〇〇年以後没。豊後大友一族か。新拾遺集以下に四首入集。貞治五一三〇五年中行事歌合の作者。そのほか歌会に列し、今川了俊に親しく度々使者となつた。紀行に『都のつと』がある。（米原正義）

宗久きう南北朝時代の歌人。俗名平吉、大炊助。大友氏の出自か。僧となつて宗久と号する。生没年未詳。（閱歴）貞治五年（二一三〇五）九月十三日の四辻善成宅での月次和歌会等に出席、十二月の『年中行事歌合』には筑紫僧として和歌四首をよんでいる。応安四年（二一三三〇）の今川了俊の九州入りに当つては豊後高崎から舟で周防下松に了俊を訪ね、以後、了俊の九州探題時代に使僧として活躍、康暦二一三〇〇年（二一三〇六）、了俊の日向志布志の大慈寺八景詩歌の要請に上洛したりしている（空華集）。（著作）観応（二一三〇一—二一三〇三）の頃、京都から関東、奥州への旅をし、『都のつと』を著わす。和歌は『新拾遺集』『新後拾遺集』『新続古今集』に四首入集。（島津忠夫）

（『日本古典文学大辞典』岩波書店）

これらの宗久の解説は、金子金治郎^中、川添昭二^二、井上宗雄^三各氏の研究成果を踏まえて纏めてあり、宗久の伝記、作品の概略にはほぼ触れ得ている。

まず、これまでの研究成果を前提としながら、出自、出家の動機、生没年などについて臆測を述べてみたい。

「勅撰作者部類」は宗久に対し「俗名平吉大炊助」とする。これに対し「扶桑拾葉集」の作者系図は「不詳其出自、俗姓平吉、初曰大炊助、或大友兵部少輔賴資、為僧号宗久、未知孰是」と二説を示し、判断を保留している。この二人は同一人ではなく「もともと時代を異にする二人の宗久だったのかもしれない」との考えも浮上する。そして当面問題としている「都のつと」の作者は、以下に述べるように「大友兵部少輔賴資」の方であつた可能性が強い。

宗久の出自で注目される資料は、井上宗雄氏によって紹介された^{註5}、彰考館蔵「一万首作者」(「二十一代集作者大臣考」と合綴)という写本である。この書は「一万首和歌題」と「一万首和歌作者」だけ列挙したもので和歌作品自体はないが、井上氏は内容を吟味し、決して仮託のものではなく、貞治三、四年頃、為明、為秀両派の提携によって、為遠一派を除外して催行された歌会と認めてよいこと、さらに当時の歌壇の様相を反映する好資料で、その作者付など歌人の伝記資料にも有益であることを述べている。そして、その作者の一人に「宗久」が列挙され、「俗名大友兵部少輔賴資」との作者注記が施されているのである。

この作者注記が催行当時、あるいは同時代のものとすれば(他の作者注記にも注目すべきものが多い)、宗久とは「大友兵部少輔賴資」の出家名となり、貴重な事実を指示していることになる。「扶桑拾葉集」の編纂は、水戸の徳川光圀らの手になるが、先の系図の一説も、水戸の彰考館蔵「一万首作者」を参照した可能性もある。

宗久が九州の出身であろうことは、貞治五年催行の「年中行事歌合」

にも「宗久筑紫僧」と作者注記があること、「都のつと」でも彼自身「しらぬひの筑紫を立ち出でしより」と記していることから認められよう。

これらを勘案すると、宗久の出自は豊後の大友氏ということになるが、「大友系圖」などに「賴資」なる該当人物は見当たらないので、大友氏支流出身かもしれない。川添昭二氏も、後述するように、宗久が今川了俊の意を体して薩摩渋谷氏・大隅禰寝氏の誘致に奔走しているところなどからみて「大友支流出身説は真に近いのかもしれない」との見解を提出している。

このように辿つてくると、宗久が大友兵部少輔賴資の出家名で、豊後大友氏支流出身とする従前の一説は、信憑性がでてくるのではなからうか。

彼がいつ、どのような動機で出家に踏み切ったか、その具体的な実情は不明である。ただ、その出家前後の状況は、「都のつと」の味読によつて、ある程度忖度することができる。

次は上野国(群馬県)で、一夜の宿を貸してくれた主人と宗久との応答の場面である。

家主出であひて、心ある様に旅の愁へをとぶらひつゝ、世を厭ひ
そめける心ざしの程など、細かに問ひ聞きて、「われも常なき世の有
様を思ひ知らぬにはあらねども、背かれぬ身の絆のみ多くてか、づ
らひ侍る程に、あらましのみにて今日まで過し侍りつるに、今夜の
物語になむ、捨てかねける心の怠りも今更驚かれて」など言ひて……
宿の主人から遁世するに至つた動機などを尋ねられた宗久は、その心
境や状況を具体的に語つたはずだが、それは省略されている。

けれども、彼の「今夜の物語」を聞いた主人が、これまで家族の絆に束縛されて出家に踏み切れなかった我が身の怠惰を、今更のように痛感したというのだから、宗久の出家が苦悩の果てに「身の絆」を振り捨てた、激しい心情を伴つたもとでなされたことが透視できよう。

「都のつと」の冒頭部の、

観応の比、一人の世捨人あり。みづから銀山鉄壁を徹る心ざしなしといへども、樹下石上を占めし跡を慕ひて、いづくもつゐの住みかならねばと思ひなしつゝ、しらぬひの筑紫を立ち出でしより、こ、かしこまよひありき侍し程に、

といった叙述からすると、観応(二五〇)―二五三以前に出家していたことは確かだが、ここに流露する、相当に緊迫した叙述の氣息には、観応年間から遙か以前に出家したのではなく、ごく近い頃という感じを受ける。

観応年間とは、まさに南北朝の動乱の直中である。南北朝の対立、抗争は畿内だけでなく、遠く九州をも捲き込んで泥沼の状態を呈していたが、宗久の出家も、単に個人的なレベルの懊悩だけでなく、世の紊乱のなかで種々な苦渋や挫折を体験した後、家族も振り捨てて出家を遂げ、行脚僧になったのではなからうか。この点を念頭に置くことは、彼の人間像の把握にとって肝心なところであらう。

宗久の生没年は未詳であるが、「都のつと」の旅にあった観応頃(二五〇)―二五三、すでに老齢を自覚しており、また、この時から三十年後の康暦二年(二六〇)に生存が確認できるので、旅立ちの頃は四十歳代かと推測される。

なお、「都のつと」の項目の『群書解題』で井上豊氏は、この宗久につき「俗に今井法師といい、弘安三年に生まれ、文和二年(二五三)七十四歳で歿したとする説もある」とするが、その根拠は未詳であり、当面対象とする宗久は貞治年間から康暦にかけても、その足跡が明確なので、「今井法師」とは全く別人である。

二

宗久なる遁世僧が初めて姿を見せるのは、「観応の比、一人の世捨人あり」と記し始める紀行文「都のつと」においてであり、それ以前の

彼の足跡は全く辿れない。

「都のつと」は群書類従に収録され、早くから知られていた作品だが、近年、新日本古典文学大系『中世日記紀行集』(福田秀一氏校注)に収録、脚注が施されて精読しやすくなった。新大系で十三頁ほどの短編だが、紀行文学作品としては、なかなかの佳品である。

旅の起筆までに宗久は、すでに筑紫を出て放浪した後、大江山まで行脚、丹波の国で越年し、翌春三月に上洛、しばらく京洛の寺社に参詣する日を過ごした後、東国行脚を決意する。その旅の目的は「修行」のためと明記しているが、以後、東海道を下向して鎌倉に到着、さらに常陸国高岡、甲斐国木賊山に分け入り、武蔵野に出て、また秩父山にも登っている。そして白河の関を越えて陸奥国に踏み入り、阿古屋の松・宮城野・塩釜・松島などの名所歌枕の地などを巡り、やがて再び武蔵野へ帰って来た所で擱筆している。

旅は足掛け三年ほどの長い行脚になっているが、その旅程で看過できないのは、高岡・木賊山・秩父山・山田の里などで庵室を結び、籠りの生活を実践していることと、脱俗・隱遁的な聖の存在を仄聞すると、その人との出会いを強烈に願望して東奔西走——いわゆる知識遍参を遂行していることである。

これらの行為は旅の目的である、僧としての「修行」の力強い実践行為を示すものだが、それと同時に、名所歌枕の地を訪れ、王朝文学、特に「源氏物語」「伊勢物語」「古今集」などの世界を重層して叙述し、それに絡めて詠歌してもいい。これは数寄人、歌僧としての側面である。

「都のつと」という紀行文を作品レベルで見ると、仏道修行という旅の目的を基軸に据えた所から横溢する種々な感慨と、名所歌枕などにかかわる詠嘆とが混融している。けれども、宗久という人間の内面を透視すると、別に論及したように、そこには、歩くという行為と籠りの生活とを繰り返し、また飽くなき知識遍参を実践、種々な人間の衝

撃的な死に遭遇し、改めて無常迅速を痛感、厳しくも澄明な自然との対峙などを通して、自己の身心の変革をひたむきに希求していた人間像が鮮明である。そして「都のつと」は次のように結ばれている。

かくのみあくがれ行く程に、日数も積りて、さすが故郷の方もおぼつかなくて、いづくを家路とも定むるとはなけれども、立ち帰るべき道は急がれ侍し程に、一夜の旅の宿にて、老の眠を醒して、壁に向へる残りの灯を挑げそへて、道すがらの名高き所、の心に残りしを、忘れぬさきにとて思ひ出るまゝに、前後の次第を言はずこれを記しつけて、都のつとにとて持上りぬ。

ここには、紀行文を執筆した場所や執筆意図、書名の由来も示唆されている。ただ、都へ帰る途中の宿で、灯を挑げて纏めたものが、現存する作品そのままかどうかは問題であり、そこには粉飾が施されているとみななければならない。「都のつと」のために執筆したというのも、紀行文の末尾によくある常套的な擲筆姿勢であり、そのままは受けとれない。彼が修行の旅の後、この作品を持って、すぐに帰洛の途についたかどうかもさだかではない。

宗久の足跡はこれ以降、十余年も跡絶えて辿ることができない。再び彼の姿を垣間見できるのは「都のつと」の旅から十余年後の貞治年間における京洛の歌壇においてである。その間、仏道修行を持続し、所々を流浪したり庵室生活を送っていたのか、すでに京洛にあつて一角の歌僧として活躍していたが、偶々記録に残されていないだけなのか、そのあたりが不透明である。

その十余年の空白に若干の示唆を与える文章を「都のつと」の跋文として二条良基が記している。

新大系の「都のつと」では、扶桑拾葉集板本を底本としたためか、良基の跋文を掲載していないが、群書類従本をはじめ、多くの諸本がこの跋文を有する。これは当代の最高文化人良基の眼に映じた宗久像として注目すべき内容を含んでいるので、類従本を底本として、漢

字宛、句読点などを付して解読しやすい本文を作成し、三つに区分して若干の補注も施して読み解いておきたい（なお、諸本と比較し、意味的に相違がでてくると思われる異文のみ、括弧で傍記しておいた）。

（跋文一）

僧に宗久といふ人あり。心を一枝の花に染め、思ひを八重の風にかけて、蓬生の跡定むる所なく、浮き草の露誘ふ水にまかせてなんまどひ歩き侍りけり。三芳野の花の春は、山のあなたを隠れがと頼み、武蔵野の月の秋は、草のゆかりを宿りにて、明かし暮らし侍れば、六十余州の抖擻残る所なく、三十一字の風情尋ねぬかたもなし。

（解説）

ここで宗久なる人物は「六十余州の抖擻残る所なく」と、俗塵を離脱して全国を仏道修行した行脚僧であるとともに、「三十一字の風情尋ねぬかたもなし」と名所歌枕を遍く訪れる歌僧としての二面性が指摘されている。風雅への思い入れは「心を一枝の花に染め、思ひを八重の風にかけて」に、また漂泊者の一面は「蓬生の跡定むる所なく」とか、「浮き草の……まどひ歩き」(1)に、遁世への渴望は「三芳野の花の春は、山のあなたを隠れがと頼み」(2)、「武蔵野の月の秋は、草のゆかり……」(3)に鮮明である。

〈補注〉

(1)わびぬれば身をうき草のねをたへてさそふ水あらばいなむと思ふ（古今集・雑下・小野小町）

(2)みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ（古今集・雑下・よみ人しらず）

(3)紫の色にはさくなむさしのの草のゆかりと人もこそ見れ（拾遺集・物名・如覚法師）

紫のひとつとゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る（古今集・雑上・読人しらず）

(跋文二)

古への賢かりし人も、あるは竹を愛する事（よとともくせとし）を好み、あるは詩を作りし事を身に添ふ病となむしける。此の人もかくのごとくなるべし。墨染の袖のうちには、とこしなへに小き硯を放たず。昔の杖のほとりには又短き筆をなむ取り添へ侍りける。

剡溪の暁の雪を望まざれども、数寄の友を尋ねては、そこはかとなくあぐられ、廬山の夜の雨を聴かざれども、沈味（しんみ）の腸をくだきて、心ざしを述べずといふことなし。

(解説)

ここでも宗久を中国の賢人や詩人と対照させることで、彼の遁世者と詩人の二面性を鮮明にする。竹を植えて「此の君」と称したのは東晋の隱遁者王子猷、「吾が友」としたのは白楽天である(1)。「剡溪の暁……」とは、王子猷が雪の夜に、友人の戴逵を訪れようとしたが、興が尽きて途中で引き返したという逸話(2)。「廬山の夜の雨……」は白楽天の詩を念頭にする(3)。このように対句表現を駆使し、宗久こそ場所こそ違え、大和における王子猷や白楽天に比肩すべき人物であり、墨染の衣をまとう僧でありながら、常に小さい硯や短い筆を所持し、風流人達の訪ねた歌枕で詠歌したとする。

(補注)

(1)晋の騎兵参軍王子猷、裁きて此の君と称す。唐の太子賓客白楽天、愛して吾が友となす。(和漢朗詠集・竹・篤茂)

(2)晋書・唐物語・十訓抄ほか。

(3)蘭省の花の時錦帳の下、廬山の雨の夜草庵の中(和漢朗詠集・山家)

(跋文三)

観応の比にや、大江山生野の道を分け過ぎてより、陸奥塩竈の浪に浮かぶまで、名ある野山の末には、思ひの露を残し置き、情多き草

木の蔭には、言の葉をかきあつめて、「あねはの松」にはあらねども、「都のつと」と名付け侍りぬ。誠に愚なるもて遊びに似たりとはいへども、などか心を伝ふる教へともなり侍らざらん。たちまちに嗟嘆の心ざしに堪へず、いささか荒蕪の言葉添へ侍るばかり也。

(解説)

この部分は「都のつと」の作品内容の簡単な紹介に始まる。名所歌枕などで感慨を吐露したこと、「情多き草木の蔭……」とは、先にも触れた上野国で宿を貸してくれた主人への哀悼詞を宿の壁に書き記したことを念頭に、人々との親密な交宜を示唆するのであろう。また「あねはの松」とは、周知の「栗原のあれはの松の人ならば都のつとにいざといましを」(伊勢物語 第十四段)を指し、それが書名の由来とかわかるとする。

最後は、跋文を記した動機を、「都のつと」を味読、その感嘆の思いに堪えなかつたところに求めている。

また、跋文執筆の年時と署名は次のように記されている。

于時貞治六年春再披見之次而記之而已

後普光園撰政

関路老槐 在判

この奥書から「良基は、貞治六年春以前に、『都のつと』を披見していたが、再度の披見に際して跋文を記したことがわかる」との見解もあるが、諸本の奥書を調査すると存疑である。即ち、類従本のほか詞林意行集本・尊経閣文庫本では、「再」とあるが、島原市立図書館蔵松平文庫本・蓬左文庫本・京都大学図書館本などは、「再」でなく「一冊」となっており、原本は「再」でなく「一冊」の可能性もあるからである。

この跋文を良基が記した年時が、貞治六年(二二七)であることは、次に指摘するように、宗久が京洛の歌壇に登場する年時と符合し、留意

すべきことである。

この跋文には、縷述したように、宗久の仏道修行者・遁世者という側面と花月に憧れ、名所歌枕を訪れて詠歌する風流人としての側面——とりわけ後者が強調されている。

「都のつと」の旅を行なった観応頃より十余年、宗久の消息は全く不明であるが、良基の跋文に窺えるように、仏道修行を基軸に据えた漂泊の旅を続けたり、そこに庵室生活を送りながらも、数寄人として和歌を詠じたりしていたのではなからうか。

少なくとも、応安・永和・康暦年間に浮上してくる、今川了俊の使者として、動乱の世を奔走する姿は窺見できない。

三

「都のつと」の旅を終えた観応頃以降、宗久が資料に顔を見せるのは、それから十四、五年も経過した貞治五年（一二六六）になるが、その前に井上宗雄氏の紹介した「一万首作者」（彰考館蔵）に触れておかねばならない。

この資料は「一万首和歌題」と「一万首和歌作者」だけを列挙したもので、和歌作品は掲載されていない。井上氏はこの書は種々な観点からみて、偽作ではなく信憑性のある資料と認定、恐らく足利義詮・為明・為秀、それに二条良基らの発企にかかる催行であったと推測している。

催行年時は廷臣の官位記載からみると、貞治三年夏秋頃となるが、三年催行では具合が悪く、四年にずれこむ官位記載の人物もある。けれども官位記載のずれは、この書が後世の偽作であるためではなく、大規模な催行のため、発企・勧進されてから、人々が詠進を完了するまでに長くかかり、貞治四年になって詠じた人もいたための不統一とみなしている。

この「一万首作者」には天皇をはじめ、良基・義詮・為明、為秀ら

の著名な廷臣・武士・専門歌人のほか、頼阿などの地下歌人にいたるまで、当時の皇族・公家・武家・僧侶の主だった人が名を連ねているが、その最後尾に「俗名大友兵部少輔頼資」の作者注記を付されて宗久の名がみえるのである。

この資料によると宗久は、貞治三、四年頃には、京洛で一角の歌僧と認められていたことになる。勿論、この「一万首作者」の歌会は、歌人すべてが一堂に会したものではなく、恐らく宗久などは、勧進を受けて詠草だけを提出したものであろうが、発企者が義詮・為明・為秀・良基らとすれば、後述のように貞治五年には良基・為秀らと接触していたことが確認できるので、彼らの推薦によって参加できたといえれば自然である。

吉田社祠官の卜部兼熙の日記「吉田家日次記」は貞治五年七月・十二月までの記録だが、その日記に宗久の歌会参加の記事がある。最初は、貞治五年九月十三日の条の記録。

十三日、壬辰、天晴、予腫物小減之間、参四辻二品羽林、和歌会也、松殿大納言入道、僧宗久并下官也、三十首也、予不逢披講早出畢、次謁冷泉前宰相卿為秀今夜会也、人数相公、少将為邦朝臣、前兵部大輔宗時朝臣、宗久、武藤樂阿、予也、百首終夜、及曉鐘終披講畢、これによると、兼熙が四辻二品羽林亭（四辻善成）での三十首歌会に出席したところ、そこに松殿大納言入道（忠嗣）と宗久も出席していたこと、その三十首歌会の披講前に退出し、さらに冷泉為秀亭で催行された百首歌会に参加、こちらは夜を徹して歌会が行なわれ、披講が終わったのは「曉鐘」に及んだというが、この歌会にも宗久が出席している。九月十三日、宗久は兼熙同様、四辻善成と為秀亭の両歌会に掛け持ちで参加していることになる。

ついで十月七日の条に「今日此亭月次和歌会也、僧宗久始而來臨、猪熊刑部來臨」と吉田亭の月次歌会に宗久が初めて参加したとの記録がある。宗久と兼熙とは、先の九月十三日にも顔を会わせているので、

そういった縁による参加かもしれないが、二人が知り合ってから、まだ日の浅いことを示唆している。

さらに十一月十九日の条にも「今日此亭月次会也、刑部指合之間無来臨、宗久、冬頼朝臣、重光以下来臨了」ともみえ、都合、「吉田家日次記」に宗久は、三箇所、四歌会に出座したことが記録されている。

けれども、十一月三日、兼熙は初めて良基邸の歌会に参加し「面目之至也」と感激、やがて十二月二十二日の条に、良基亭での「年中行事歌合」の披露に参加し「参候人々同先度御會也」としているが、「年中行事歌合」には宗久の参加があるので、十一月三日の良基亭の歌会にも宗久の参加があったことも考えられる。

続いて貞治五年十二月下旬催行の、著名な「年中行事歌合」に宗久の参加があるのは看過できない。

「年中行事歌合」は「公事五十番歌合」などとも称されるが、為秀などの企画で良基が主催、貞治五年十二月二十二日に良基亭で披露された、公事・年中行事を歌題とした五十番からなる特異な歌合である。

衆議判によって為秀が判を加え、良基が判詞と行事解説を執筆している。参加者は二十三名だが、宗久の交友圏も窺見できるので、次に全員列挙しておく。

良基・師良・良冬・忠嗣・善成・為秀・忠頼・為邦・長綱・家尹・貞世・宗時・師嗣・秀長・経賢・濫賢・宗信・嗣長・守長・兼熙・頼阿・宗久・頼乗

これらは、「吉田家日次記」で兼熙が出入りしていた、良基・為秀・善成・忠嗣・武藤樂阿の各亭の歌会に出座していた人物が大部分を占める。いわば良基・為秀系の人々を中心とした私的な歌合であるといえる。

この出座歌人のなかで留意されるのは、今川貞世（了俊）である。

貞世は「吉田家日次記」によると、貞治五年十月十四日の条の武藤樂阿亭、十一月二十七日の条の為秀亭などにも顔を見せているので、宗

久との出会いは、「年中行事歌合」催行以前、どこかの歌会でなされていた可能性は充分にあり得る。

この歌合で宗久は、六番左「春日祭」で殿中将（師嗣）、二十四番右「信濃勅旨駒引」で新中納言（為秀）、三十二番左「賀茂臨時祭」で宗時朝臣、四十六番右「祈雨」で宗時朝臣と合わせ、三十二番は勝、他の三番は持という、まずまずの成績を修めている。

ところで、橋口裕子氏は「吉田兼熙の歌壇活動——吉田日次記」貞治五年の記録を通して——の論考で、この歌合の判詞傾向を分析、兼熙や宗久の判詞には、歌の出来不出来でない視点からなされたものがあって特異であること、これは二人が二条家へ顔を出してまだ日が浅い、「つまり先に見た判詞は、兼熙・宗久ら新参の者たちへの、歓待の意をこめたサービスの配慮だったのではなからうか」と付度している。

やがてこの翌年の貞治六年春、先に触れたように良基は「都のつと」を読んで感嘆のあまり、跋文を記しているのである。

宗久が良基と面識を有するようになったのは、これらの事実からみても貞治五年頃であり、それを契機に「都のつと」を披露したのではなからうか。

以上の足跡を辿ってくると、宗久が京洛の歌壇に登場し、人々にその存在が知られるようになったのは、やはり貞治年間に入ってからではないか、その最初の痕跡は貞治三、四年頃の「一万首作者」である。この後宗久は、京洛に腰を据え、良基や為秀らの歌会の常連となり、歌僧として生涯を貫徹することにはならなかったようである。

今川貞世との邂逅などが、宗久をして筑紫の地に再び赴かせることになったのではなからうか。

四

新しい九州探題は迂余曲折を経た後、管領細川頼之の推薦もあり、今川了俊に決定した。応安三年六月のことである。

了俊は九州下向を前にして、周到な手配をした後、翌応安四年（三三）二月二十日に都を出発した。この時の紀行文が「道行きふり」であり、そこに宗久が登場する。

それは了俊が、十一月に下関市にある住吉神社に祈念し、夢のうちに見えけむ神の御そぎぬの袖の羽風はなほぞ吹くべきと詠じた歌に込めた背景を説明した、次の場面においてである。

この歌の心は、今年九月、豊後の高崎の城より、宗久という僧、こなたに渡り侍らむとて、船に乗り侍りながら、順風なかりける夜の夢に、齢八十ばかりの翁の、髪・鬚白きが、烏帽子に淨衣着たる一人出で来て、左の袖をひろげて、「これに乗りて船出せよ」と言ひて、袖をうち振り給ひければ、追風吹きて、こなたに渡りぬと覚えてその曉、風よくなりぬとて、船出でて、日のうち周防の下松といふ所に着きぬと語られしことを、ふと思ひ出でて侍りしほどに、この歌も、その心をかたかてよめるなり。

これによると宗久は、豊後の高崎城から周防の下松まで船で到着している。了俊は九月下旬に周防に滞在していたので、宗久はそこへ到着し、住吉明神の靈験譚としての夢の話をつたのであろう。

当時、豊後の高崎城では、了俊の子息義範らと菊地武政らとの激しい攻防が繰り返されていた。宗久はその戦況を了俊に伝えるため、使者としてやって来たとみなしてよからう。

ここに了俊の使者として奔走する宗久の姿を垣間見できるが、この行動は古文書類によっても跡付けられる。

川添昭二氏は『中世文芸の地方史』で宗久に触れ、「今川了俊の南九州の経営に際しては、薩摩渋谷氏・大隅禰寝氏の誘致に奔走し、今川了俊の意を体して戦略指導にも当たっている」としている。これは禰寝文書や入来院文書に散見される「久庵主」を宗久と同一人物とみなしたの見解による。即ち、宗久は「大慈八景詩歌集叙」（空華集）による

と「瞬庵」と号していたので、「久庵主」と呼称されたのではないかと推測である。「久庵主」が先の文書類に出てくるのは、永和二、三年頃で、この頃、宗久が他の場所で行動している痕跡もないし、了俊の使僧であることなども勘案すると、久庵主は宗久の可能性は強いのではないだろうか。

さて「久庵主」の出でくる文書は、ほとんど了俊の書状であるが、推測年次も加えて幾つか列挙しておく。

- (1)（永和二年か）九月十六日、「渋谷清敷」（重頼）宛了俊書状（薩摩入来院文書）。
- (2)（永和三年か）九月五日、「御方深重の人々」宛了俊書状（大隈禰寝文書）。
- (3)（永和三年か）十一月二十二日、「兵部大輔」（今川満範）宛了俊書状（同前）。
- (4)（永和三年か）十二月十四日、「兵部大輔」（今川満範）宛了俊書状（同前）。
- (5)（永和四年か）三月五日、「兵部大輔」（今川満範）宛了俊書状（同前）。
- (6)（不詳）（後半欠で宛先・月日不明）、今川満範書状（同前）。
- 他に、今川了俊事書案（永和二年か）（大隅禰寝文書）にも見える。
- (6)の満範書状には「兼又探題御使ニ久庵主去廿四日莫禰まで下着候、今明日之間ニ総州方へ可被越之由承候、大方如風聞者、彼御僧ハ先両方合戦を、為可留候之由承及候……」と、久庵主が了俊の使者として、合戦の調停にかかわっている姿をみる。また、(1)の書状では、渋谷一族の参陣に関し「殊ニ目出候、久庵主下向候、急々御同道可目出候」とみえ、(2)では「伊久・氏久可参之由申候間、不日ニ可参陣由、以久庵主申遣候」、(4)では「久庵主心安候て下て候へハ、事書のほかの事とも、させられ候けに候、……ハしく此僧ニ申て候」、(5)には「久庵主も任雅意てせられ候て、面白なさ候ハし、……我扶持し申て候しなと、此僧申けり」、(3)では「久庵主、又氏久・伊久方への状、同にて候、

御つけ候へく候」などと、その使僧としての役目の一端がほの見える。即ち、これらの書状類からは、先に川添氏の見解にあったように、了俊の南九州経営に際して、島津氏久攻略のため、大隅の雄族である禰寝氏や薩摩の渋谷氏を誘致するため、了俊の使者として、所々を奔走する久庵主の姿が彷彿としてくる。

なお、「久庵主」と紛らわしい人物として「冬庵主」が応安七年頃から康暦元年頃にかけて、了俊書状に散見、使者として活動している。「久」と「冬」の草書体は近似するので、「冬庵主」は「久庵主」の誤字、誤読かもしれないが、今、断定はくだせない。

さて、宗久その人とおぼしき久庵主が、このように、永和年間、了俊の使者として働いているが、宗久なる人物が、その後、京洛の歌会に姿を見せている。

康暦二年（元）四月二十三日、足利義満は二条良基亭に出向き、まづ北亭で鳥合、ついで為遠の出題に依って前もって詠進していた短冊を取り集めて披露する歌会のあったことが「迎陽記」の同日の条にみえる。その参加者は、良基・師嗣・義満・為遠・為重・為尹・雅家・経賢ら二十七名であったが、その中に宗久がいて、二首を提出しているのである。

永和年間、九州で所々の戦陣を駆け巡っていた「久庵主」が康暦二年に京洛の歌会に顔を出しているのは唐突であり、久庵主＝宗久説に疑問も浮上してこよう。

けれども、康暦二年に宗久が了俊の使者として上洛せしめられていたという別途の証拠資料があるので、久庵主を宗久と同一人物とみるのに矛盾はきたさない。

義堂周信の「空華集」^{註21}（巻十三）に収載の「大慈八景詩歌集叙」によると、了俊は日向国諸県郡志布志の名刹大慈寺の境内の八景を選び、京洛の詩僧や公卿に「大慈八景詩歌」の創作を依頼したが、その使者となったのが、ほかならぬ宗久その人だった。宗久に対し「大慈八景

詩歌集叙」は、「有^リ道人^ノ名^ヲ、宗久、號^ス瞬菴^ト。善^{スル}歌詞^ヲ者^{ナリ}。邦人重^シ之^ヲ。與^ニ探題公^ト殊^ニ厚^シ。」と紹介する。彼が「大慈八景詩歌」を人々に勧進した年月は、同じ周信の「空華老師日用工夫略集」の康暦二年七月の条の、

十八日為清祖侍者、求^レ改^ニ八景目子^ト。盖日向州龍興山大慈寺境地也。廿七日往^ニ雲居菴^ト與^ニ普明國師^ト説話。即見^レ出^ニ示大慈八景龍山壽望詩^ト。

によって、康暦二年七月以前とわかる。先の同年四月の良基亭の短冊歌会参加も、この八景詩歌勧進のために上洛していたときとみなしてよい。

この年、宗久は長く都に滞在したようで、「為重集」^{註24}の康暦二年八月の条には、

廿一日、宗久房張^{マツ}帳行十界歌、西寒夜雪
やどとなき旅ねに雪をかたしきて月も夜ぶかき西の山もと

（二四二）

とみえ、歌人達に和歌を張行している。

宗久の事跡は、「為重集」の康暦二年八月二十一日をもつて跡絶えている。先の「大慈八景詩歌集叙」によると「以^ニ短詩^ヲ贈^テ瞬庵^ヲ歸^ニとあるので、八景詩歌を九州の了俊のもとに持ち帰ったのではなからうか。そして宗久は了俊の使僧として再び九州の各地を奔走し、その地で死没したのかもしれない。

「都のつと」の旅に出発した観応頃（三）一三三から数えて康暦二年（三）は三十年後である。仮に観応頃を四十歳代とすれば、七十歳代までは生きていたことになり、かなりの長寿を保ったといえよう。

なおここで、「源氏物語」の巻名和歌の注釈書と関連する宗久なる人物にも触れておく。

稻賀敬二氏『源氏物語の研究——成立と伝流——』によると、伝定家作「光源氏巻名歌」に注解を加えた「山頂湖面抄」（水原）の類に宗久

の名がみえるという。

即ち、島原市立図書館蔵松平文庫「水原」には、目録の次に「序」があり、その末尾に「文安六年正月吉日 比丘尼祐倫」と記し、以下、五十四帖の巻名歌と注解が加えられ、巻末に、

以上五十四帖 作者祐倫

右定家卿之志を訪て如^レ此注し宗久[・]為御望故一部五十四首之所を奉^レ顯所也、則光源氏之影移る水原可^レ成

とみえるというが、この奥書を信用すれば、祐倫は「水原」を宗久に与えたことになる。

ここで論及してきた宗久が、「源氏物語」に親炙していたことは、「都のつと」をもつてしても臆測でき、そのことは島内景二氏の論考にも詳述されているし、「河海抄」の著者四辻善成亭の歌会などに入入りしていることも示唆的である。従つて、祐倫から「水原」を与えられた宗久も同一人物とみなしたいところだが、そう認定するには、すでに稲賀氏が述べているように年齢的に無理がある。

「康富記」によると文安年間頃に源氏読みの老比丘尼祐倫が実在したことは確かであり、「都のつと」の頃、すでに老いを吐露している宗久が文安六年（1249）まで生きていたことは考えがたい。仮に観応頃を四十歳とすれば、文安六年は百四十歳となり、別人とみる方が穏当ではなからうか。

五

最後に歌僧としての宗久に触れておく。

彼は勅撰歌人ではあるが、家集も現存しないし、残っている和歌作品も多くない。

「都のつと」には二十一首の和歌が鏤められているが、そのうちの二首は贈答歌による他人の歌で、自身の歌は十九首である。その大部分は、旅先で鏡山・佐夜の中山・宇津の山・清見が関・富士の山・箱根・

白河の関・宮城野・末の松山・塩釜の浦・松島などの名所歌枕を見聞した際の詠歌である。

それらの和歌は、例えば、

立ち寄りて見つと語るな鏡山名を世に留めん影も憂ければ
紅葉せば夢とやならん宇津の山うつゝに見つる蔦の青葉も
宮城野の萩の名に立つ本荒の里はいつより荒れ始めけむ
などのように、「古今集」や「伊勢物語」の歌を念頭にしたもの、あるいは、

こ、はまたいづくと問へば天彦の答ふる声も佐夜の中山
箱根路や水海荒る、山風に明けやらぬ夜の憂さぞ知らる、
のように、常套的な掛詞や縁語を駆使したものも散在する。

なかでは、人間の死を凝視し、無常を痛感したときに詠じた、
見し人の苔の下なる跡問へば空行く月もなを霞むなり
袖濡らす歎きのもとを来て訪へば過ぎにし春の梅の下風
故郷はげにいかなれば夢となる後さへなをも忘れざるらん
誰となき別れの数を松島や雄島の磯の涙にぞ見る
などの歌が、しんみりした哀感を反響させて印象に残る。

勅撰集には「新拾遺集」に一首、「新後拾遺集」に一首、「新続古今集」に二首、合せて四首入集する。

「新拾遺集」の、

今朝みれば竹のかけひを行く水のあまるしづくぞかつ水りぬる

（雑上・一六九〇）
正26

の歌は、「題しらず」なので詠歌事情は明らかではないが、竹の懸樋の雫の水りついたさまをとらえており、隠遁生活の実体験を背景にしているのかもしれない。また、その心情は、

山ざとのかけひの水のこほれるはおときくよりもさびしかりけり

（千載集・雑中・輔仁のみこ・一一〇三）

このねぬるよのまのかぜやさえぬらんかけひのみづのけさはこほ

れる
(統古今集・冬・近衛院御歌・六二六)

などの先蹤歌にも通うものがある。

「新後拾遺集」の歌は、
むさし野もさすがはてある日数にや富士のねならぬ山もみゆらん

(羈旅・九二二)

で、これまた「題しらず」で詠歌事情は不明だが、広大な武蔵野の光景を実感的に詠じているので、「都のつと」のときの旅の体験が発想基盤にあるのかもしれない。

むさしのやゆけども秋のはてぞなきいかなる風かするゑに吹くらむ

(新古今集・秋上・通光・三七八)

の歌を念頭にしての詠歌であらう。

「新統古今集」入集歌は、ともに「新玉津島杜三十首歌に」という詞書を有する、「時雨」と「不逢恋」を歌題とする次の二首。

たち帰る尾上の雲にさそはれて又山めぐる夕時雨かな

(冬・六一五)

身をしれば猶こそうけれいつの世につれなかりけるむくいなるらん

(恋二・一一六四)

井上宗雄氏は、この「新玉津島杜三十首」は、宗久も参加していた「一万首作者」となんらかの関連があるかもしれないと推測している。

前者の歌は、時雨を「山めぐる」とするが、これは、

もろともに山めぐりするしぐれかなふるにかひなき身とはしら

(詞花集・冬・左京大夫道雅・一四九)

の趣向の系譜にたつ歌。後者は、自分が恋しい人に逢えないのは、前の世にあの人につれなくあつた報いかもしれない、そういう運命の身であることを知れば、いよいよもって憂く辛いという意だが、内容的には、同時代の歌僧長舜の

思ひわびなほこそうけれ前の世のむくいは人の科ならねども

(統後拾遺集・恋・一七三〇)

の歌の発想と酷似するのは興味深い。

宗久は冷泉派の了俊や為秀らと接触はあったが、彼らの歌会に出席する以前に、すでに歌風が定まっていた感があり、それは二条派的な詠風といつてよいのではなからうか。

この他に宗久の和歌は「年中行事歌合」に四首みえるだけである。年中行事を歌材とした点で特異な和歌だが、歌風的にはあまり問題とならないので、一応、四首を列挙するにとどめたい。

春日祭

春日山よの神わざけふごとにたえずつかふる雲のうへ人

(六番左)

信濃勅旨駒引

引分はをかやに立ちしあら駒のみなれぬ袖におどろきやせん

(二十四番・右)

賀茂臨時祭

ちはやぶる賀茂の河かぜ山あひの袖にいくたび雪さそふらん

(三十二番左)

祈雨

雨雲のはやたちなびく水主の神に手向を猶やかさねん

(四十六番右)

以上、管見に入つた宗久の現存する和歌は、「都のつと」に十九首、勅撰集に四首、「年中行事歌合」に四首、あわせて二十七首ということになる。

おわりに

稀少な資料を綴り合せながら、「都のつと」の作者宗久の生涯と作品の一端に触れてきた。

彼の出自は豊後大友氏支流と思われるが、恐らく南北朝の社会の素乱や人間相互の軋轢の苦悩の果てに、家族をも振り捨てて出家したと

臆測される。

「都のつと」には、仏道修行者として、行脚と庵室生活を繰り返し、また熱烈に知識遍参を實踐して自己変革に励む宗久の厳しい姿が印象鮮明である。

けれどもその後の彼の行動をみると、出家当初に抱いた一念を貫徹し得たとは思えないふしがある。

彼はやがて、修行・隠遁生活に徹し得ないまま、京洛の歌壇に姿を現わし、文人僧的な行爲にはしる一面を見せている。

その変貌の背後には、経済的な生活基盤の問題や精神的な葛藤もあったろうが、なによりも南北朝という怒濤の世相が大きな影響をおよぼしていたように思われる。

やがて京洛で今川了俊と邂逅し、了俊の九州探題赴任に関与してであろう、彼の使僧となり、九州各地を奔走する。

このように宗久の生涯には、なにか複雑な陰翳が感じられるが、彼のような人間は、動乱の世の「落し子」として、他にも少なからずいたのではなからうか。

例えば、梵灯庵の生涯なども類似な輪郭で限取られている。

彼は、足利尊氏以来、足利氏の家臣であった朝山氏の出自であり、宗久より少し後、貞和五年(三三九)に生まれた。そして朝山師綱と称し、和歌や連歌などの才に秀でた武士だった。四十歳前後頃まで出雲守を歴任、將軍義満にも仕え、使者として九州薩摩にも下向しているが、故あって四十余歳の頃に遁世、その後二十年に及ぶ行脚生活に踏み入る。諸国を流浪し、知識遍参の旅を続けたさまは、「梵灯庵返答書」の上巻の一部「梵灯庵道の記」(仮称)によって窺見できる。^{註28}

しかし、梵灯庵も宗久同様、生涯その生活貫徹せず、やがて六十余歳頃に帰洛、歌壇や連歌界で活動するのである。

宗久や梵灯庵のように、挫折の後に出家し、行脚・遁世生活を送りながらも、その初志を貫徹できず、複雑な心情を抱きつつ、仏道と風

雅と政治の間に揺曳した僧侶は、この時代には多出したであろう。

彼らは行脚によって修行するだけでなく、その過程で諸国の名所旧跡を訪れたり、種々な民俗伝承や戦闘のさまを見聞したのであろう。

中世文学、特に軍記物語や説話文学の成立の背景を支える伝承には、宗久のような行脚する歌僧達がなんらかの関連を有していたのではなからうか。現に宗久は「道行きぶり」で、自分が体験した住吉明神の不思議な靈驗譚を了俊に語っている。全国を行脚し、あるいは九州各地の戦闘の中を使者として奔走しながら、彼は種々な伝承や情報を得て、人々に語ったと思われる。

文学史の上では、ささやかな存在の宗久ではあるが、そういった私なりの思い入れもあってマイナーな作者に照明を当ててみたわけである。

〔注〕

- (1) 「中世作家と地方文学」(広島大学文学部紀要、昭和三十年三月、後に『新撰寛政波集の研究』収録。
- (2) 「九州探題今川了俊の活動」(九州文化史研究紀要、昭和三十八年十月)、『中世文芸の地方史』。
- (3) 「中世歌壇史の研究 南北朝」。
- (4) 稲賀敏二氏「源氏物語の研究——成立と伝流——」。
- (5) 注(3)に同じ。
- (6) ただし、「筑紫僧」という作者注のない本もある。
- (7) 続群書類従(巻百五十)所収など。
- (8) 「中世文芸の地方史」。
- (9) 引用文は、新日本古典文学大系『中世日記紀行集』に依拠。
- (10) このことは、拙稿「中世紀行文学の旅の諸相とその意味」(中世文学、第三十九号、平成六年)で詳論した。
- (11) 島内景二氏「『都のつと』と王朝古典文学——中世紀行文学に見る『源氏物語』の影響——」(電気通信大学紀要、第四巻第一号、平成四年六月)参照。

- (12) 注(10)に同じ。
- (13) 木藤才藏氏『二条良基の研究』。
- (14) 注(3)に同じ。
- (15) 『大日本史料 六編の二十七』に依拠。
- (16) 橘口裕子氏「吉田兼熙の歌壇活動」(国文学攷、第百三十一号)も、そのように推測している。
- (17) 注(16)に同じ。
- (18) 引用は新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』に依拠。
- (19) この点は、川添昭二氏に直接私信で質問し、御見解を提示していただいた。
- (20) 古文書類は、川添昭二氏編『今川了俊関係編年史料上・下』や瀬野精一郎氏編『南北朝遺文 九州編第五卷・第六卷』を参照した。
- (21) 『五山文学全集 第二卷』所収。
- (22) 川添氏は、了俊のこの企画は「高度な政治的效果をもつ」と論及している(『中世文芸の地方史』)。
- (23) 『統史籍集覧第三冊』所収。
- (24) 『新編国歌大観』に依拠。
- (25) 注(11)に同じ。
- (26) 以下の和歌の引用本文は『新編国歌大観』に依拠。
- (27) 注(3)に同じ。
- (28) 金子金治郎氏『連歌師と紀行』に、「梵灯庵道の記」の考察がある。
- 〔付記〕 川添昭二氏からは、種々な御教示や資料提供を受けました。深く感謝いたします。

(平成七年四月十日受理)